

Contribution

寄稿

保育で問うべきことは何か

東京大学名誉教授 佐伯 胖 (さえき ゆたか)



Profile

プロフィール

岐阜県生まれ。1970年ワシントン大学大学院心理学専攻Ph.D.取得。

東京理科大学理工学部助教授、東京大学教育学部助教授、同教授、同大学院教育学研究科長・教育学部長。2000年4月より青山学院大学文学部教育学科教授、同社会情報学部教授、2015年より田園調布学園大学大学院人間学研究科教授、2021年退職。2012年より公益社団法人信濃教育会教育研究所所長となる。

現在 東京大学・青山学院大学名誉教授、信濃教育会教育研究所所長

専門 認知科学、幼児教育学

主著 (単著)『幼児教育への誘い』(東京大学出版会)、(共著)『子どもを「人間」としてみる』(ミネルヴァ書房)、(編著)『子どもがケアする世界をケアする』(ミネルヴァ書房)、(共著)『子どもって、みことな人間だ!』(フレーベル館)ほか多数。

私は研究特別委員会B部会の『幼児理解と保育者の役割』で講師を務めて参りました。そこで話したことを以下に要約しておきます。

私は保育者のみなさんが保育実践の中で知らず知らずのうちに陥っている落とし穴が三つあるように思います。

第一は、「保育を問う」ということを「○○のときは、どうすればいいの?」を問うことだとすることです。講演などで結構なお話しを聴いても、「じゃあ、結局、どうすればいいの?」の答えを求め、答えらしき結論を(勝手に?)ひきだして、「ああ、そうすればいいんですね。」ということ、で、「本日は良い勉強になりました。」となる。これは保育者の関心がすべてHOW・IO(いかにあるべきか)にあり、WHAT(それはどういうことか)、WHY(それはなぜなのか)という疑問をもたないということです。どうして「WHAT」や「WHY」を問わないのかというと、保育者のみなさんが「まじめに、よく勉強してきた」ことによるのです。「勉強」では、何が「正解」かは誰かエライ人(自分ではない)が決めており、それを覚えることや、そういう正解が素早く確実に出来るよ

う練習することに、精を出してきたからです。「正解が出せること」だけを目指すクセが身につけると、何を聞いても「じゃあ、どうすればいいの?」と「正解」だけをほしがるようになってしまふのです。

第二は、第一の落とし穴から必然的に生まれる落とし穴で、それは「ネバ・ベキ」思考です。HOW・IO思考の行き着く結論は「じゃあ、どうすべきか」、「どうあらねばならないか」ということばかりが気になってくる。その気がかりは、そのことが常に「評価される」ことへのおそれでもあります。ここでいう評価は自分なりの「これでもいい」という判断ではなく、外的基準で定められた評価基準をもとに、外部の人から査定される評価です。保育者は「計画書」と「報告書」の提出に追われており、それらが常に「人目にさらされる」評価が下されるのです。そうすると、保育者は常にさまざまな「評価されること」を「ネバ・ベキ」こととして意識せざるを得ません。

第三の落とし穴は、保育を「子どもの能力を育むこと」だとすることです。ここでいう「能力」は、さきの「ネバ・ベキ」が恐れていた外的評価基準で真つ先に評価される項目です。ようするに「何ができるようになったか」ということが、つねに「問われている」と思い込むことです。さまざまな知的能力(思考力・判断力・表現力など)以外に、最近では「非認知能力」といって、忍耐(がまんする力)、意欲(やる気)、協調性(みんなに合わせる力)、主体性(みずから進んで行動する力)なども非認知的な「能力」であり、それらは保育で「育むべきこと」だとされる(したがって、なんらかの形で「評価」される)わけで

すから、保育者は不安におびえてしまふ。以上の三つの落とし穴から抜け出るには「どうすればいいのでしょうか」——こういう疑問をもつてしまふと、それは第一の落とし穴にはまってしまう。

そうならないためには、HOW・IOではなくWHAT/WHYを問うことです。

保育において問うべきWHAT(それはなんであるか)は、「子どもって、そもそもどういう存在なのか」という問いです。それに対して、従来当然視されていた「幼い、未発達な存在」という子ども観を脱して、「子どもって、生まれたときから、みごと人間なんだ」ということを、あらためて確認していただきたい。

つぎに問うべき問いはWHY(どうしてそうなのか)です。なぜ、子どもは「みごと人間」なのか。その答えの一つとして私が講演でお見せしたのは、NHKスペシャル「Human なぜ人間になれたか」の録画でした。そこでは、人類が現在のホモサピエンスに進化するときに「他者を思いやる心(empathy)」を身につけたことが大きく寄与していることが、「黒曜石の分布」の発掘から実証されていました。そのことを言いかえると、「子どもは(むしろ人間は)、他(モノ、ヒト、コト)をケアしないではおられない」存在だということ。

このことを踏まえると、「保育とは何か」という、保育者が問うべきWHATへの答えが見いだされます。それは、「保育とは、子どもがケアしている世界をケアすることである」ということです。以上が、私がB部会の『幼児理解と保育者の役割』で話したことの概要です。